BEYOND

issue 4

THE RAINBOW

TOKYO RAINBOW PRIDE
OFFICIAL MAGAZINE
2018 SPRING

特集

LGBTと学校

SUPER SHINY & SUPER ALLY

必ずしも目立たなくても、確かな光を日本の各地で放ちながら活躍しているLGBTQの人たち、マイノリティーがそのままで生きていける公正な社会をともに作っていく非LGBTQの人たち。
そんな人々を「SUPER SHINY& SUPER ALLY」として紹介します。

photo_Rody Shimazaki illustration_Ruiko Kozuka text_Shinya Yamagata, Naoki Ota (Takizawa)

⑪

滝沢ななえ
Nanae Takizawa

30歳／レズビアン
パーソナルトレーナー
タレント／元バレーボール選手

1987年東京生まれ。小学2年生からバレーボールを始め、八王子実践高校時代は「春高バレー」等で活躍。その後、実業団チームに所属後、2013年に引退。現在は、パーソナルトレーナーをしながらタレントとしても活動している。

バレーボール選手時代、ガッツあふれるプレーとその可憐なルックスで、
お茶の間をにぎわせていた滝沢ななえさん。
引退後はバレーボールコーチとして活動し、その後パーソナルトレーナーに転身。
2017年11月には、日本テレビ系番組『衝撃のアノ人に会ってみた！』にて、
レズビアンであることをカミングアウトした。彼女はとても明るくて笑顔が印象的な人だ。
今回は、変化を恐れず、笑顔で一歩前に踏み出しつづける彼女のポリシーに迫った。

誰かを愛せる喜びのほうが、大きかった…

「22歳の頃、初めて女性とお付き合いしたのですが、自分は女性が好きなんだと気づけてすごく嬉しかったんです。私も誰かを愛せるんだって。以前は男性とお付き合いしていたこともあったのですが、周りの友人みたいに『早く会いたい』と夢中になることがなくて。自分がマイノリティであるということには、全くショックを受けなかったですね」

カミングアウトのきっかけは何だったのだろうか。

「カミングアウトを決めたのは、今所属しているジムの代表が背中を押してくれたことがきっかけです。『自分にしかできないことを大切にしてほしい。ななちゃんがセクシュアリティをオープンにしたいと思うなら、すごく意味があるから応援したい』と言ってくれました。そんな時、テレビ出演の話が偶然来たんです。打ち合わせの中で『彼氏か旦那さんはいますか?』と聞かれて『彼女がいます』と自然にこたえました。ディレクターさんは初めすごく驚いていましたが『ぜひ取り上げたい』と言ってくださったので、感謝しています。放送まではすごく緊張しましたが、終わってみて一番驚いたのは、特に驚くようなことがなかったことです（笑）。母は少し心配してくれていましたが、周囲で態度を変える人は全くいなくて。兄弟も友人もお客様も、「言えてよかったね、おめでとう！」とか「絶対に恋人いると思ってたよ！」といったように、自然に受け入れてくれました。踏み出してみて、本当によかった、と思っています。」

誰の人生でもなく、私の人生

「人と違う」ということで苦しむ人がたくさんいる中、マイノリティであることに全く悩まなかったという彼女。どうして、こんなにも明るく、強くいられるのだろうか。

「私は『人生は、一度きり』とよく考えるんですね。だから人からどう見られたっていい。誰の人生でもなくて、私の人生だから。『やってみたい』という気持ちをいつも大切にしてきました。高校を出た時、夢だった体育大学に行くか、実業団に行くのか、すごく悩んだんですね。正直、実業団では実力が通用するのか不安がありました。それでもそっちを選んだのは『今しかできない、やってみたい』と強く思ったから。心から「行ってよかった」と思っています。中学高校とはうって変わって、全然試合に出られない、なかなか練習もさせてもらえない、という日々でしたが、その中で必死についていこうと努力した経験は、私の人生にとってすごく意味がありました。自分がいかにちっぽけな存在なのかを自覚できましたし、謙虚な姿勢が身についたから」

「人生は、一度きり」そう分かっていても、踏み出す勇気がない人も多いはず。一歩踏み出す上でのポリシーはあるのだろうか。

「先のことばかり考えない、というのは大切だと思っています。何事も踏み出す前は怖いですが、踏み出した後はもうその選択を楽しむだけ。『楽しむ』ということがとても大事だと思っています。人生は楽しむから、楽しい。

私はバレーボールからその姿勢を学びました。悩みすぎるとアスリートをやる上ではつぶれてしまう。人生と一緒で、苦手なプレーは誰にでもあって、できないことに厳しくあたる人もいます。それに悩んでしまうと競技を続けられなくなる。だからまずは自分のできることを大切に。そしてできないことには悩みすぎず、楽しみながら、できるようになる方法をいつも考えるようにしてきました。だから悩むことがあまりにないので、彼女に対しても『今回のケンカって何が原因なのかな？　どうやったらすれ違わないかな?』とか言ってしまって、『そんなことどうでもいいの！』と怒られたりするんですが（笑）」

「LGBTは、ふつうに存在している」と伝えたい

最後に、自分と同じセクシュアルマイノリティに伝えたいことはあるか、と聞いてみた。

「カミングアウトを全ての人がする必要があるとは思っていません。でも、カミングアウトしたいけど不安だ、という方がいれば、『たとえ全員が受け入れてはくれなくても、分かってくれる人は必ずいるから、勇気をもって』と伝えたいです。やっぱり人生は一度きりですから、自分の生きたいように生きたほうがいいと思うんです。

私自身はこれから『LGBTの人も、ふつうに存在している』ということを伝えていきたいと思っています。それこそ『愛は、愛だ』じゃないですが、私たちは何も変わらず生きている、ということを、自分が自然体で生活する姿を発信することで、伝えていけたらと思っています。そこだけは、ぶれずにやっていきたいです」

国境を越え、“夫夫”になった二人

2013年5月、ブラジル最高裁判所は、同性カップルが婚姻届を出しても拒否してはいけないとする決定を表明した。これによって事実上、ブラジルは同性婚ができる国となった。2017年9月、ブラジル人のジエーゴさんと、現在は日本籍のOPAさんは、ブラジルで婚姻届にサインした。振り返れば、二人が初めて顔を合わせたのは2012年9月、きっかけは出会い系アプリだった。すぐに意気投合し、付き合い始めた二人だったが、大きな試練がやってくる。

ジエーゴ：12月に一緒にHIV検査を受け、結果を受け取りに行きました。結果を聞いて部屋を出ると、私より先に入った彼が、まだ出てきていなくて……。
OPA：陽性だったんです。ショックでした。年齢差もあるし、ジエーゴのこれからの可能性を狭めてもいけないので、「なんだったら、別れてもいいよ」って。
ジエーゴ：私はきっぱりと、「いま一番したくないことは、別れることです」と言いました。
OPA：申し訳なさと、ありがたさで、もう号泣でしたね。
ジエーゴ：なんとなく覚悟はしていたんですが、実際、そうだとわかると、やっぱりショックで。彼が説明を受けている間、友達に電話をして話を聞いてもらい、少しずつ落ち着いていきました。

OPAさんの健康のことも心配だったので、二人は翌月には一緒に住み始めることにした。掃除や洗濯は気がついたほうがやり、食事は早く帰ってきたほうが作る、というのが基本ルールだそうだ。

OPA：僕がすごく結婚願望が強かったんです。付き合って1年が過ぎたくらいから、「結婚しようよ」って冗談めかして言ってて。ちょうどジエーゴの誕生日パーティーがあって、その場で、友人たちの前でプロポーズしました、飴細工の指輪を渡して。

ジエーゴ：嬉しかったけど、まだ奨学金をもらっている学生の身で経済的に不安定だし、いつ日本を離れないといけなくなるかわからない状態では、OKとは言えなかった。

昨年春、ジエーゴさんは無事大学院を卒業し、講師として出身校への就職も決まり、約束どおり、本格的に結婚に向けて準備が進められた。

ジエーゴ：ブラジルでは異性も同性も婚姻の手続きは同じで、ただ国際結婚で二人ともブラジルに住んでいないため、多少手続きが煩雑だったのですが、そこはブラジルの弁護士さんに頼んで書類を整えてもらいました。

9月、二人はブラジルに赴き、5周年の記念日に婚姻届にサインをした。晴れてお互いにハズバンドとなり、ジエーゴさんの家族とともにささやかな食事会をしてお祝いした。とはいえ、二人の関係は、日本では、法的には「赤の他人」。何の法的な裏付けもない。

OPA：国際結婚をしたゲイカップルとして、まだ同性婚が認められていない日本で何ができるのか。例えば、こうしたインタビューでメッセージを発信したり、あるいは「夫婦」が受けられる民間サービスを積極的に利用するなどして、同性カップルが当たり前に存在していることを伝えていきたいですね。

日本に帰国後、あらためてOPAさんの家族や友達を呼んで結婚式場で披露宴を催したという。そんな二人に、将来について尋ねてみた。

OPA：僕はもう両親がいないし、年齢を考えると、彼のほうがこの先、長いわけだから、彼のキャリアアップを優先していきたいです。そして、もし彼のお母さんのケアが必要になったら、僕も一緒に行ってケアしたいと思っています。
ジエーゴ：家族としての絆を、共に築いていきたいですね。

最後に、二人がスタッフとして携わっている「NOT ALONE CAFE」について聞いてみた。

OPA：来日して間もない、主にゲイやバイセクシュアル男性のためのカフェスペースで、毎月第1日曜の午後、新宿2丁目の「Dragon Men」でやってます。ジエーゴも在日外国人だし、僕も在日韓国人として寂しい思いをしたこともあったので、単身で日本にやって来た外国の方に、「一人じゃないよ」って伝えられればと思って活動しています。

12
OPA
45歳／ゲイ

1972年、韓国人の父と日本人の母との間で東京に生まれる。語学学校卒業後、様々な職種を経験。現在は障がい者に向けた就労移行支援員として働く。DJを趣味とし、ロック、歌謡曲、Perfume関連イベントを中心に活動中。

12
ジエーゴ
Diego
30歳／ゲイ

2011年から日本に住んでいるブラジル人。東京大学で修士と博士学位を修得し、現在同学で講師として勤めている。来日して間もない外国人のためのカフェスペース『Not Alone Cafe』のボランティアスタッフとしても活動。

⑬

上川あや

Aya Kamikawa

50歳／トランスジェンダー
世田谷区議会議員

2003年4月、日本で初めて性同一性障害を公表のうえ、世田谷区議会議員選挙に立候補し、当選。その後、3度再選し、現在4期目。著書に『変えてゆく勇気』（岩波新書）がある。

時代や地域の“常識”に踊らされないでいたい

思春期、男性に恋をし第二次性徴で男性化する身体への違和に悩んでいた頃。幼馴染みで、身体の色素のないアルビノの親友に、「みんなに嘘をついている自分が嫌い」と苦悩を吐露したことがある。彼は言ってくれた、「決してついてはいけない嘘じゃないよ」と。自責の念に駆られていた自分を救ってくれたこの言葉を、その後も幾度となく反芻したという。
20代後半から性別移行を始め、女性として暮らすようになり、「TSとTGを支える人々の会」の運営メンバーとして性別変更を求めるロビイング活動に携わった。そして、2003年4月、日本で初めて性同一性障害を公表のうえ、世田谷区議会議員選挙に立候補し、当選。その3か月後の7月10日には「性同一性障害特例法」が成立する。

「トランスジェンダーの政治参画は、絶望が生み出したものでした。2001年の家庭裁判所への性別訂正の一斉申し立ては却下され続け、年金手帳等の行政書式の性別変更を求めても相手にされず、残った立法府でも、会ってくれる国会議員はほとんどいませんでした。司法や行政への失望がロビイングにつながり、こんなに切実なニーズがあるのに、会ってくれない政治家を前にして、私の選挙は生まれました。当初は他の誰かに訴えてほしいと思っていました。でも、私自身、体験から語れる言葉をたくさん持つのに、差別を恐れ隠れている。そう考えたとき、他人にリスクを負わせるのは違うと思い、立候補することにしたんです」

区議会議員になり、その後、再選を重ね現在4期目を迎えた上川さん。特例法が成立した当時も今も、思っていることがある。

「法律や条例、あるいは行政施策で救済策を講じようとすると、どこまで対象者に含めるかという論議が必ず起こります。“多様な性”のグラデーションと、それらの線引きとはもともと相容れないものなので、批判が出てくるのは必然と言えます。特に立法は、保守的な人が多い議会の中で、Yesを取る作業です。だから、議会そのものを市民一人一人が変えてゆくという意志を持たないと、保守的な議会では保守的な法律しか通らない。そしてフロントランナーとして、そこで働きかけをする人は、現実の厚い壁の中で最大限の“実”を取ることを余儀なくされる。さらにその結果について、コミュニティからは批判を受ける。特に前線に立つ政治家は、それを甘んじて受け入れなければならない立場なんだと自覚しています」

世田谷区の同性パートナーシップ証明制度では、区内の同性カップルに働きかけるなど、リーダーシップを発揮して成立にこぎつけた。

「同性パートナーを承認するだけで、何の権利も利益もないじゃないかという批判もありました。でも、同性を愛することの正当性を自治体が公式に認め、同性カップルの存在を承認することは、すべての議論のきっかけとなるという確信がありました。認めた以上、何の手当てもしないなんて不可能なので、実際、民間サービスや区営住宅の入居も認められてきましたよね」

世田谷区や渋谷区が実施した同性パートナーシップ証明制度は、その後、札幌市や福岡市をはじめ他の自治体にも広がっていく。

「今どこが動かしやすいかといえば、地方行政です。現時点で同性パートナーを認めている自治体の人口を、見込みも含めて合計すると、1,000万人近くになります。地方が変わっていくことで、国そのものにも影響を与えていくことができる。そう考え、2017年7月、地方を動かしていくために、当事者議員を中心にLGBT自治体議員連盟を立ち上げました。定期的に勉強会を実施し、今年の東京のパレードではみんなで歩きたいと思っています」

この4月から、世田谷区では「世田谷区多様性を認め合い男女共同参画と多文化共生を推進する条例」が施行されている。

「この条例のポイントは、男女共同参画に多文化共生の考え方が加わり、性別にもとづく差別はもちろん、性自認・性的指向・国籍・民族等による差別まで広く禁止したところと、苦情処理制度が運用されるところです。成立まで紆余曲折がありましたが、顕在化する民族差別一般にも配慮した条例の成立は全国初。差別をみとめない地域社会づくりが注目を集めています」

最後に、政治家として、また一人の人間として、大切にしていることを聞いてみた。

「時代や地域の“常識”に踊らされないでいたい。そこから面白い議論ができるし、それを裏付けるファクトを探すことは、公共空間でとても大切です。マイノリティって力がないわけじゃない。きちんとしたファクトの提示で議論は動かせる。公務員法はきびしく守秘義務を課すから、プライバシーを守りながら、市民が変革を訴えてゆくことも可能。両立できます。民主主義は私たちのもの、私たちが使うべきものです。
個人としては、少なくとも心の中では、社会の価値付けに支配されないで生きたいと思っています。セクシュアリティを偽って生きるのは、私にとって幸せじゃない。それを隠して生きるのも嫌ですね。自分自身を生きなきゃ、人は幸せじゃないから」

いつもそうなのだが、上川さんの話を聞き終わると、勇気が湧いてくる。

HIV疫学研究者としてゲイコミュニティと連帯

戦後４年が過ぎた1949年、那須岳中腹の開拓村で生まれた市川誠一さん。父は開拓村で僻地医療に携わるお医者さんだった。父の後を継ぐことも考えたが、大学では衛生学を専攻。ウイルスの面白さにはまり、ウイルス感染症の研究者を志し、大学院を卒業後は横浜市大の公衆衛生の研究室に就職した。

「ウイルスの研究ができると思って入ったんだけど、1970年代当時、工業地帯のある横浜や川崎では大気汚染がひどく、住民の中で慢性気管支炎といった呼吸器系の症状が見られるようになっていました。住民の健康被害を調べるために各戸を訪問して調査票に回答を記入していく仕事をやらされ、当初は嫌でやめたくて仕方なかったんだけど、今思えば、あの時の経験がその後のHIVや性感染症の疫学研究にとても役に立ったと思っています。公衆衛生の大切さを思い知らされたというか」

しばらく公害被害の調査をしていたが、研究室の教授がウイルス感染症をテーマにしている人に変わり、そこでエイズを知る。

「アメリカ疾病予防管理センター（CDC）による、アメリカのゲイ男性がカポジ肉腫を発症するケースが多発しているという報告について教授から聞き、その後エイズ(後天性免疫不全症候群)と命名されたこの病気は、HIVウイルスによる感染症だと確定され、瞬く間に世界に広がっていきます。日本でも1983年厚生省（当時）にエイズ研究班ができ、1984年からエイズ発生動向調査（サーベイランス）が始まり、教授が委員だった関係で僕も分析を手伝うようになります。これがエイズと関わり始めたスタートでした」

その後、エイズのサーベイランス分析は続けていたが、その過程で、日本でも同性間での感染が今後増えていくのではないか。93年ベルリン、94年横浜の国際エイズ会議に参加して海外の研究者と触れ、さらにその考えは強くなったという。94年に横浜のハッテン場（ゲイ男性が利用する簡易宿泊施設）を実際に利用者として見学し、そして95年と96年に実施したのが、いわゆる「ハッテン場のゴミ調査」だった。

「個室のある複数のハッテン施設にお願いして、個室使用後に出たゴミをその都度ビニール袋に入れて全部集めてもらって、コンドームの有無を調べ、２年目にはゴミから精液を抽出してHIVウイルスの有無も調べました。すると3週間で165室のサンプルが集まったうちの19％が陽性だったんです。その数字には、本当にびっくりしました。この結果をゲイコミュニティにきちんと返さないといけない。そう思い、主要なエイズ関係のNGOを集めて報告会を実施しました。しかし、この調査方法自体が人権侵害ではないかと、なかなか結果を聞いてもらえませんでしたが、３回目でようやく報告することができました」

97年、厚生省HIV疫学研究班MSMグループができ（MSM＝Men who have Sex with Men／男性と性交渉をする男性）、分担研究という立ち位置で市川さんもMSMグループを担う。その流れで1998年4月、MASH大阪が発足し、2000年から2002年までの毎年、HIV/STI臨時検査イベント『SWITCH』が開催され、2003年4月にはドロップインセンター〈dista〉が始動する。一方、東京では2000年にMASH東京ができ、それがRainbow Ringに改組された後、2003年コミュニティセンター〈akta〉の運営が始まる。名古屋〈rise〉、福岡〈haco〉、仙台〈ZEL〉、沖縄〈mabui〉が加わり、現在も運営されている6か所の活動拠点が開設された。まさに市川さんこそが、これらのコミュニティセンターの「生みの親」なのである。

「オーストラリア・シドニーの成功例を視察したこともあって、HIV予防啓発活動へのゲイ当事者の参加、ゲイコミュニティとの協働は絶対に必要だと考えていました。そしてその活動の拠点となるコミュニティセンターの開設も不可欠だと感じていました。ゲイコミュニティへのアプローチはhard-to-reachと言われるのですが、それは社会の側が勝手に作っている壁のせいで、その壁を超えて連携すれば、全くそんなことはないんです」

最後に、これまでの研究生活を振り返ってもらい、これからについても聞いてみた。

「公害から始まって、HIV/エイズ、その中でも特にMSMを中心にした研究は30年以上になりますが、公衆衛生をやってきて本当に良かったと最近つくづく思います。ハッテン場調査ではかなり批判され、ゲイのことはゲイでないとわからないと言われたこともあり、振り返るとまあ、いろいろありましたが、ゲイコミュニティと関わったことでたくさんの人と出会うことができ、人生の宝物になりました。これからは、これまでの経験を踏まえ、後進の育成にも力を入れていきたいです。こらからのキーワードは、若者、地方、アジア。この10年ほどモンゴルのゲイコミュニティと関わりがあり、東京で実施されていたHIV陽性者の手記を読む『Living Together Lunge』というイベントがいま、モンゴル版にアレンジされて行われているんです。イベント名はモンゴル語なんだけど、それを英訳すると、“We are living under the same sky”でね、遊牧民の国、モンゴルらしいでしょ」

市川先生が40年をかけて粘り強く蒔いた種は、セクシュアリティを超え、年代を超え、国境を越え、いま芽を出し、実をつけはじめている。

5

市川誠一

Seiichi Ichikawa

68歳／人間環境大学看護学部特任教授

1949年栃木県那須郡那須町生まれ。北里大学大学院衛生学研究科衛生学専攻修士課程修了。名古屋市立大学などで教鞭を執った後、現在、人間環境大学看護学部特任教授。感染症、主にHIV/性感染症に関する疫学研究をテーマにしている。

「あの日」の自分に、背をさすられる。

text:太田尚樹（やる気あり美）

17歳のエリオは、毎年夏になると北イタリアのヴィラで家族と過ごす。美術史学を専門とする大学教授の父と翻訳家の母の下で育つ彼は、若い肉体とはアンバランスなほど高い教養をもった少年だ。クラシック音楽を編曲したり、読書をしたり、夜遊びをしたり、彼の夏を彩るものは多い。

毎年ヴィラには、父の研究を手伝いにインターンがやってくる。今年は24歳の大学院生、オリヴァーという男だった。彼はこれまでのインターンよりも知的で、自信にあふれているように見え、エリオはどこか気に食わない。彼の口癖である「後で」をマネしては、母親に叱られたりしていた。

それでもまばゆい夏の日ざしの中、街を散策し、川で泳ぎ、音楽と文学に浸かる中で、いくつかのすれ違いを交えながら彼らは心を通わせていく。ある日オリヴァーは聞く、「君の知らないことは、ある？」。エリオはこたえる、「大事なことは知らないんだ」。沈黙の中、互いに惹かれていることを認め合った二人は、去りゆく夏と逆行するかのように恋に落ちていく。「君の名前で僕を呼んで」、それは、本来ひとつであったと感じるほどに魂を重ね合わせた二人の自然な願いだった。だけど夏は終わることをやめるわけもなく、二人の別れが迫ってくる……。

ラストシーンを見終えて、僕は二十歳のある日を思い出した。映画の美しい情景からはほど遠いけれど、なぜか開いてしまった記憶の引き出し。その日僕は、安いチェーンの居酒屋の同窓会で、長らく片思いしていた」に「セックスしようよ」と言われた。会も終わりに近づいて、部屋には2時間前のお行儀の良さを失いぐったりとした座布団と旧友が散らばり、僕らの近くには誰も座っていなかった。

今振り返っても真意は分からない。僕は永遠のような数秒間で答えをさがしたけれど見つからず、とにかく笑い飛ばしておくことを選んだ。机の下にかくれた右手をかたく握りしめ、左手で「するかよ！」とつっこんだ。パンッと頼りない音が鳴る。」は大きな声を出して笑って「ごめんごめん」と言った。その顔は屈託のないいつもの晴々とした笑顔で、出し抜こうとした人間の含みのようなものは全く感じられなかったから「こいつ、相変わらずバカだなぁ」と僕は思った。そして「あぁ、終わったなぁ」となんとなく思った。

その後は何を話したのかあまり覚えていないけれど、僕はなんだかヘラヘラしていたほうがいい気がして、あるようなないような歌を鼻歌で歌いながら家に帰った。そして部屋に入って、立ったまま泣いた。情けないのか、悔しいのか、悲しいのかは分からなかったけれど、月明かりがぼんやりと充満した部屋の中、濡れていく床をずっと見ていた。

本当に映画とはほど遠い思い出だ。だけど、実際あの日のことをこんなにもハッキリ思い出したのは初めてだった。「主人公と自分がかぶった」なんて言うのはおこがましいけれど、「恋にセカイを染められた17歳の原型」と取れるほど純度の高い少年性をもったエリオの瞳は、僕らを吸い込んで、そこに過去の自分を見つけさせる。エリオを演じきったティモシー・シャラメの実年齢が22歳だというのは、何回聞いても信じられなかった。彼の演技は「凄みがある」という表現が似合わないのに圧倒的で、史上最年少でのアカデミー賞主演男優賞が期待されたのも理解できる。

もちろん素晴らしいのはシャラメだけではない。オリヴァーを演じた、アーミー・ハマーは、今すぐエリオの情熱と同化したいという衝動にかられながらも、恋の駆け引きの主導権を握りたい傲慢さと、その背景にある臆病さをもった、大人の入り口に立つ青年を見事に演じている。彼の葛藤が物語前半の緊張感をうみ、そして恋に落ちた後の甘さを引き立たせる。

この映画は「LGBT映画」という単純なラベルが似合わない映画だ。エリオと彼を取り囲む人々のひと夏につれ立つことは「観る」というよりも「体験する」に近く、その中で何度も僕らは、幼い自分の首筋から香る、蒸れた草花のような青臭い匂いを肺いっぱいに嗅ぐ。そして

あの、困惑しながら感動を重ねた日々の中、いかに自らが成長していたのかに気づかされる。

エリオは寂しさを埋めるためにマルシアを弄んだが、いつか彼女の言った「これからも友だち？」という一言の優しさを知る日がくるだろう。また、あの時頭をなでてくれた母の手の温かさは、彼の体の芯にしっかりと残り、いつか彼の手の温度も上げるだろう。そして父からもらった言葉たちは、オリヴァーから言われた「何ひとつ、忘れない」というひと言は、これからも彼が恋に期待する理由となっていくだろう。

忙しい日々の中で気丈さを求められ、己の感傷を許すことが難しくなった全ての大人にどうか観もらいたいと願う。幼き日の自分に「君は汚れたんじゃないよ、成長したんだよ」とやさしく背をさすられるような、そんな映画だった。

4/27（金）
TOHOシネマズ シャンテ 他
全国ロードショー

『君の名前で僕を呼んで』

監督：ルカ・グァダニーノ／脚色：ジェームズ・アイヴォリー／原作：アンドレ・アシマン／出演：ティモシー・シャラメ、アーミー・ハマー、マイケル・スタールバーグ 他／2017年イタリア、フランス、ブラジル、アメリカ／132分／提供：カルチュア・パブリッシャーズ／ファントム・フィルム／配給：ファントム・フィルム

© Frenesy, La Cinefacture

太田尚樹
1988年、大阪出身のゲイ。神戸大学卒業後、リクルートに入社。その後退社し「世の中とLGBTのグッとくる接点をもっと」をコンセプトに活動する『やる気あり美』を発足。同名WEBメディア編集長に。また現在はフリーランスとして、スタートアップのブランディングや雑誌連載など、幅広く活躍中。
Twitter：ot_john

『BPM』── 性と生と政をめぐる聖なる映画

text:北丸雄二｜ジャーナリスト

冒頭のAFLS（AGENCE FRANCAISE DE LUTTE CONTRE LE SIDA＝フランス対エイズ闘争局）会議への乱入やその後の仲間内の議論のシーンを見ながら、私はしばしこれはドキュメンタリー映画だったかと錯覚していました。それは私が1993年からニューヨークで取材していたACT UPの活動そのものでした。白熱する議論、対峙する論理、提出される行動案、そして通底音として遍在する生と死の軋むような闘ぎ合い。そこはまさに1993年のあの戦場でした。

あの時、ゲイたちはばたばたと死んでいきました。感染者には日本人もいました。エイズ報道に心注ぐ友人のジャーナリスト宮田一雄は、現地日本人コミュニティのためのエイズ電話相談をマンハッタンで開設しました。相談内容からすれば感染の恐れは100%ないだろう若者が、パニックになって泣いて電話をかけてくることもありました。友人になった者がHIV陽性者だと知ることも少なくなく、そのカムアウトをおおごとではないように受け止めるウソも私は身につけました。感染者は必ず死にました。非感染者は、感染者に対する憐れみを優しさでごまかす共犯者になりました。死は遍在していました。彼も死んだ。あいつも死んだ。あいつの恋人も死んだ。みんな誰かの恋人であり、息子であり、友だちでした。その大量殺戮は、より延命に効果的なカクテル療法が始まる1995年以降もしばらく続きました。

あの時代を知っている者たちは、だからACT UPが様々な会合や集会やパーティーや企業に乱入しては二セの血の袋を投げつけ破裂させ、笛やラッパを吹き鳴らし、怒号をあげて嵐のように去って行ったことを、「アレは付いていけないな」と言下に棄却することに逡巡します。「だって、死ぬんだぜ。おまえは死なないからそう言えるけど、だって死ぬんだぜ」というあの時に聞いた声がいまも心のどこかにこびりついています。死は、あの死は、確かに誰かのせいでした。「けれどすべて政府や企業のせいじゃないだろう」── そんな論理で責任は無限に分散され、死だけが無限に膨張しました。

誰かのせいなのに、誰のせいでもない死を強制されることを拒み、あるいはさらに、誰かのせいなのに自分のせいだとさえ言われる死を拒む者たちがACT UPを作りました。NYでのその創設メンバーには、自らのエイズ支援団体GMHCを追われた劇作家ラリー・クレイマーもいました。『セルロイド・クローゼット』を書いた映画評論家ヴィト・ルッソもいました。やるべきことはやってきた。なのに何も変わらなかった。残ったのは行動することだったのです。

そんな直接行動主義は、例えばローザ・パークスを、例えば川崎バス闘争事件を知らない者たちによって、いつも「もっと世間に受け入れられるやり方があるはずだ」との批判を再生産され続けます。なぜなら、その批判は最も簡単だからです。易さを求める経済の問題だからです。ローザも、脳性麻痺者たちの青い芝の会も、そしてこのACT UPも、経済の話をしているわけではなかったのに。

「世間」はいちども、当事者だったためしがありません。

この映画には主人公ショーンとナタンのセックスシーンが2回描かれます。始まりと終わりの。その1つは、私がこれまで映画で観た最も美しいシーンの1つでした。けれどそれはまた、私の知る限りで最も悲しい笑いでした。愛情と友情を総動員して果てた後の、どこにも行くあてのない、笑うしかない切なさ。時間は残っていない。私たちは、その悲しく美しい刹那さと切なさとを通して性が生につながることを知るのです。それが政に及び、それらが重なり合ってあの時代を作っていたことを知るのです。

彼らが過激だったのはウイルスが過激であり、政府と企業の怠慢が過激だったからです。その逆ではなかった。この映画を観るとき、あの時代を知らないあなたたちにはそのことを知っていてほしいと願います。ACT UPが「AIDS Coalition to Unleash Power＝力の限りを解き放つエイズ連合」という頭字語であるとともに、「Act up＝行儀など気にせずに暴れろ」という文字通りの命令形の掛詞であることにも考えを及ばせてほしいのです。そうして、それが神々しいほどに愛おしい命の聖性を、いまのあなたに伝えようとしている現在形の叫びなのだということにも気づいてほしい。なぜなら、いまの時代の優しさはすべて、あの時代にエイズという禍に抗った者たちの苦難の果実であり、いまの時代の苦しさはなお、その彼ら彼女たちのやり残した私たちへの宿題であるからです。

エンドロールが流れはじめる映画館の闇の中で、それを知ることになるあなたは、喪われた3,500万人もの恋人や友人や息子や娘や父や母や見知らぬ命たちに、哀悼と共感の指を強く静かに打ち鳴らしてくれているでしょうか。

全国公開中
第70回カンヌ国際映画祭グランプリ作品

『BPM ビート・パー・ミニット』

監督・脚本：ロバン・カンピヨ／共同脚本：フィリップ・マンジョ／出演：ナウエル・ペレーズ・ビスカヤート、アルノー・ヴァロワ、アデル・エネル、アントワン・ライナルツ 他／2017年／フランス／143分／配給：ファントム・フィルム

© Ce_line Nieszawer

原点としての映画『BPM』＝現代に生きるエイズ・ラディカリズムの参照点

text:稲場雅紀｜特定非営利活動法人アフリカ日本協議会 国際保健部門ディレクター

午前3時。突然鳴った電話で起こされ受話器を取ると、米国の直接行動型NGO「保健へのグローバル・アクセス・プロジェクト（HealthGAP）」の若手指導者アジア・ラッセルの声だ。「日本はグローバルファンドへの拠出を渋りに渋っている。途上国への治療アクセスにも消極的だ。怒りを表明するため、日本ブースを襲撃する。日本人のあなたも参加してほしい」。飛び起きた私は逆向きの怒りを沸騰させる。「日本についての方針を、日本人のいないところで勝手に決めるな。そもそも日本ブースには宣伝用の青年海外協力隊員しかいないんだぞ」。瞬時の判断力に定評のあるアジア・ラッセルも、この時は意外な反撃に戸惑った様子で、翌早朝に、行動の責任者である「ACT UP Paris」のハリル・エルーアルディギとの会合をセットすると約束した。映画『BPM ビート・パー・ミット』に出てくるショーンやナタンの末裔ともいうべき「ACT UP Paris」のハリルは、モロッコ移民の子息で「ACT UP Paris」には珍しく英語の達者な若手指導者だったが、私にはやせこけた頼りない若者に映った。「当然だが市民的不服従の行動の範囲は越えない。物理的に暴力を加えたり、物を壊したりするわけじゃない。展示物を叩き落としたりするくらいのことはやるが」。私は、21世紀の日本が、80年代末あたりまではいくらでも行われていたその程度の直接行動に対しても極端に潔癖な社会へと大きく変化してしまったことはよくわかっていた。実際、「沖縄感染症対策イニシアティブ」を首脳級で打ち出したその国の援助セクターは、一部の専門家を除いて、誰もエイズに対して本気ではなく、何かあればとっとと逃げ出す口実にしかねない脆弱性を持っていた。私はノーを貫き、ハリルは戸惑いながらも、その行動について、抗議文を手渡し、机や壁にステッカーを貼る程度の穏健なものにすることを約束し、実際に行動はその程度のものになったが、終わった後で一枚一枚ステッカーをはがす協力隊員の強迫的な表情が私を陰鬱にした。

2004年、タイ・バンコクで行われた国際エイズ会議での一コマである。映画『BPM』は1992年〜93年頃のフランス・パリのエイズ・ラディカリズムをテーマにした映画であるが、それから十年余、96年の三剤併用療法の本格導入を経て、この時期には、エイズ・ラディカリズムは先進国から世界へと拡散し、さらに、エイズ治療薬へのアクセスと知的財産権をめぐる多国籍製薬企業と市民との闘いも一定の決着を見て、あとは具体的に資金をどう捻出し、どう途上国でのエイズとの闘いに取り組むか、また、HIV陽性者や、MSM（男性と性行為をする男性）、セックスワーカー、薬物使用者といったHIV感染への社会的脆弱性を抱えるコミュニティのエイズ対策への主体的な参画をどう勝ち取るかに主眼が移っていた。その各局面において、エイズ・ラディカリズムは高い効果を上げた。それは、ラディカリズムがむごたらしく排除され続けた80年代〜90年代の日本での私の経験とはかけ離れていた。アジア・ラッセルら優れた直接行動活動家たちは、直接行動の必要な場面では常に街頭に立ちつつも、その一方で、自らの死力を尽くしてグローバルファンドや米国大統領エイズ救済緊急計画（PEPFAR）をめぐる政治に参画し、金を渋ったり目先の利益の追求に走りがちな先進国を叱咤激励し、途上国の政府代表の尻たたきや能力強化に努めてエイズ対策の主流化を推進してきた。その後アジア・ラッセルはウガンダに移住し、エイズに取り組むアフリカの市民社会のPEPFARへのアドボカシーをまとめ上げつつ、各国のHIV陽性者やコミュニティの人権確立に邁進している。「ACT UP Paris」のハリルは『BPM』にも出てくるフランスの巨大なエイズ支援組織「AIDES」と連携して仏語圏西アフリカのエイズ対策を支援するNGOを設立し、航空券連帯税の資金をエイズ対策に投入するフランス政府の政策を市民の立場で促進してきた。リーマン・ショックを経て国際保健の課題の構造が変動する中でも、エイズ・ラディカリズムの活動家たちは国際保健の主要各テーマの中にしぶとく陣取り、存在感を発揮し続けている。エイズ・ラディカリズムは懐古の対象ではなく、様々な局面において輝き続けているのである。

映画『BPM』も、その意味で、決して「懐古」の映画ではない。エイズ・ラディカリズムを経験した現代の国際保健や途上国の開発戦略は、その不十分さを補うべく「誰一人取り残さない」といった表現を動員して自らを飾り立てるようになっている。表現と闘争とが直結していたエイズ・ラディカリズムの時代と、そこで生き・死んだ人間の息吹をまるごと復元したこの映画は、むしろ、国際保健や例えば「持続可能な開発目標」（SDGs）にかかわる市民社会が、そのように殺されつつある表現の本来の生命力を回復し、魂を入れるために、立ち戻りくみ取るべき原点をなしているのである。

KEYWORD

ACT UP
1987年3月、ニューヨークで発足したエイズ・アクティビストの団体。正式名称は「AIDS Coalition to Unleash Power（力を解き放つためのエイズ連合）」。英語の「Act up＝派手に暴れろ」にも掛けられている。エイズ感染者への差別や不当な扱いに抗議し、無策の政府や製薬会社への直接行動も辞さず運動を展開した。ACT UP Parisの設立は1989年。

BPM
「Beats Per Minute」の略。音楽では、楽曲演奏のテンポ（速さ）を表す単位。医学では、心拍の速さを表す単位。

HIV
ヒト免疫不全ウイルス（Human Immunodeficiency Virus）のこと。ヒトの体には、様々な細菌、カビやウイルス等の病原体から健康を守る「免疫」がある。HIVは、その免疫にとって大変重要な、白血球の中のCD4リンパ球に感染し、破壊してしまう。

AIDS（エイズ）
後天性免疫不全症候群（Acquired immune deficiency syndrome）のこと。HIVがヒトの体内に侵入すると、免疫に大切な「CD4リンパ球」が徐々に減っていき、普段は感染しない病原体にも感染しやすくなり、様々な病気を発症する。この状態を「エイズ」と呼び、日本では23の疾患が決められ、これらの症状が出現したときにエイズと診断される。

連帯するマイノリティのハーモニー
～韓国・女性国劇とゲイ・コーラス～

text:Akira the Hustler

p.44-45共に〈変則のファンタジー Anomalous Fantasy_Korea Version〉Performance at Namsan Arts Centre, 01hr20min (2016)（画像提供:南山アートセンター）

ゲイ・コーラスをやってる知人たちが、横浜で公演に参加すると聞いて観に行ってきた。韓国のビジュアルアーティストの鄭恩瑛（siren eun young jung）が、韓国でかつて大人気を博し、今は廃れてしまった女性だけで作り上げる女性国劇（ヨソン・グック）を主軸に、コーラスをするクィアたちを絡めて韓国を皮切りに台湾、そして日本で製作した公演『変則のファンタジー』だ。

――この作品を構想した時の話を聞かせてください。

韓国の女性国劇では宝塚もまたそうであるように、群舞が重要なパートを占めるのですが、国が男女混成の「唱劇」だけをサポートして女性国劇は排除されてしまった歴史があるんですね。生き残っている俳優たちも高齢で、伝統や技術を伝える人がほとんどいなくなってしまいました。今回の公演のために私が連れて来たナム・ウンジンは女性国劇に憧れて、この世界に入ったにも関わらず孤独な状況に置かれています。私はこの寂しい状況下にある、この俳優を少しでも良い舞台に立たせたかった。

そこで思いついたのが、同じように社会から疎外されているマイノリティで、かつ合唱をはじめとした歌で舞台表現をしている人々と彼女を同じ舞台に立たせるのはどうだろうということでした。

また、この舞台作品を初めて発表した韓国の南山芸術劇場は、もともと軍事政権時代に男性たちの近代芸術を強く推すために作られた場所なのですが、それ以前にはゲイやトランスジェンダーたちのクルージングをする空間でもありましたし、すぐ下の明洞はレズビアンクラブが初めてできた街です。私はこの場所が持つ特性も利用しつつ、ずっと研究してきたフェミニスト的な視点やLGBTの観点との融和を試みたいとも思いました。

演劇って、そもそもギリシャのコーラスを基盤に発展したらしいんですね。そしてその「歌」は、ただの合唱というよりは、村の長老たちが葛藤する主人公の話を聞いてやって知恵を分けてあげるような役割を持っていたんです。

韓国での公演ではG-Voiceというゲイのコーラスグループに参加してもらいました。それぞれの人生を語るインタビュイーとして、また舞台の上でミュージカルのパートも一緒に作りました。公演で使った曲の中には、若者の自殺やエイズを発症することで誰かを亡くした経験が多く語られていて、コミュニティの中にある痛みを伴った経験が浮き彫りにされました。

――ギリシャ演劇における「葛藤する主人公」というのは今回の作品の中では廃れかけている女性国劇を志しつつも、孤独な状況におかれている俳優、ナム・ウンジンさんなんですね？

はい、そうです。その彼女が舞台の上で人生を、そして女性国劇を志しながら経てきた紆余曲折と孤独を、実際にメイクをし、「男になっていく＝ジェンダーを変化することができる、または挑戦して行く」姿を見せていく過程を辿りつつ語っていきます。そして「知恵を主人公に分けて上げようとする長老たち」のパートを担ったのがゲイのコーラスグループの面々です。私は主人公である女性国劇の俳優が彼らの痛みも伴った人生の体験談を聞く形を作ることで、ステージの上に少数者たちの連帯を作り出したかったのです。

――その後、台湾そして今回の日本での公演を続けてこられたんですね。

台湾ではG-Majorというゲイ・コーラスのグループと出会いました。ちょうど同性婚の合法化が司法判断なされる直前だったので、参加してくれた人々に力がみなぎっている感じがありました。ハッピーな雰囲気で劇を導いていくことができました。

一方、今回の日本では出演してくれるコーラスグループを探すのに難航しましたが、個人的なルートを通じてコーラスをするゲイだけでなく、女性やトランスジェンダーにもインタビューをすることができたことが良かったと思っています。年齢の幅もグッと広くなりました。

©Rody Shimazaki

鄭恩瑛
siren eun young jung

女性役者のみで行なわれるヨソン・グック（女性国劇）の歴史やそのコミュニティを追う「女性国劇プロジェクト」を10年間展開しながら、展示、舞台、上映、研究、執筆など幅広い範囲で活動。その集大成となる本『Trans-Theatre』を2015年に発行。フェミニズム美術の言語の拡張に挑み、個人の情動が介入する政治的かつ歴史的な瞬間に興味を持つ。パフォーマンス作品に『（オフ）ステージ』『マスタークラス』『変則のファンタジー』など。

違う国でこの作品を現地の人たちと作るたびに、その場所が持つ社会的な脈略やインタビュイーの経験によって作品の雰囲気が変わるのですが、それがとても重要なことなのだと思っています。

――sirenさんにとって、セクシュアルマイノリティであることと、アーティストであることの関係はどういったものなのでしょう？

アーティストとしての自分とレズビアンである自分というのは当然、関係を結んでいると考えてます。でもだからといって、「クィア・コミュニティのためだけ」に作業をしなければとは思っていません。

一方で私が思考し、作業をする際にクィア方法論というものが確かに存在するのを感じています。同じものを見ていても、それを見る観点や分析するためのフレーム、表現する方法。そういったものがよりクィア的な方法論を取ることで可能になっていく感じがあるな、と。例えば今回の作品で女性国劇を研究し始めた時、私にとっては女性国劇は単純に女性だけで作られた演劇というよりは、その女性たちがどのような女性に「より拡張される」ことが可能なんだろうか、ということに興味がありました。

今回の作品の冒頭で、昔の女性国劇の男役俳優とそのファンが撮った仮想結婚式の写真が写し出されました。これはふざけて撮られたものだという人もいるのですが、私にはおふざけのように見えなかった。素材やテーマをクィアに求めるというよりも、あるイメージや事象の裏面に何を読み取るか、どのようなクィア的な視点でそれを眺めるのか。それが私にとって作品を作っていく上でとても重要なことなのだと思っています。

『ぼくを燃やす炎』

text:ティーヌ｜読書サロン

まずは、ある少数者（マイノリティ）について語らせてほしい。

日本で書籍を、なんと実用書ではなく小説を、そのうえ翻訳小説を、しかもスペインの小説を買って読んだ、圧倒的な少数者のことである。そして特に、そのスペインの小説を日本語で読みたいがために出資した、382人の勇気ある行動者（アクティビスト）たちのことである。まあそのうちの1人は私なんだけれども。

この小説は、サウザンブックス社から発売された、スペインのヤングアダルト作品である。サウザンブックス社は、クラウドファンディングのシステムを活用して本を出版する会社だ。『ぼくを燃やす炎』も、382人から290万7,780円の資金を集めて出版に至った、異色の経歴の小説である。

SNSやオンラインゲームなど、常に娯楽が提供されている現代人にとって、独りで、何日にもわたって、中断と再開を繰り返しながら継続しなければいけない「読書」というものは、なかなかハードな遊びかもしれない。それでも、それに価値を見出し、お金を払ったすべての人を、私は、心から讃えたい。ありがとう、おかげで良い作品と出会えました。

「ヤングアダルト」とは、中学生から大学生ぐらいの、若者向けの小説のジャンルである。YAと省略されたり、かつてはジュブナイルと呼ばれていたりした。この小説の主人公オスカルは16歳の高校生だが、決して、他の年齢の人が読んでいけないわけではない。痛々しいほどの、あまりにも赤裸々な描写は、むしろ、年を追うごとに味わい深くなってゆくようだ。

本作中に登場するジャンディ・ネルソン著『君に太陽を』のほかにも、ヤングアダルト作品には、サリー・ガードナー著『マザーランドの月』、ベッキー・アルバータリ著『サイモンvs人類平等化計画』、映画化されたドイツの名作ヴォルフガング・ヘルンドルフ著『14歳、ぼくらの疾走』（映画邦題『50年後のボクたちは』）、少女たちが主人公のフランチェスカ・リア・ブロック著『"少女神"第9号』などがあり、これらはどれもLGBTが登場する作品なので、次に読む本を決める時に、ぜひ参考にしてほしい。

この『ぼくを燃やす炎』は、ブロガーである著者が、悩める少年少女たちのために書き上げた、デビュー作である。2005年に同性婚が合法化されたスペインでも、田舎はいまだ、偏見が強い。そんな小さな町に住む、ゲイの少年の成長物語は、多くの読者を勇気づけてくれるだろう。

なあに、今すぐ読めと言っているのではない。ただ、『ぼくを燃やす炎』に関しては、本屋で偶然見かけるということはほぼないと思うので、まだ手元にない方には、今すぐ注文することを強く勧めたい。

なかなか読む時間が捻出できなくても心配ない。いずれ本のほうから、熟れた果実のような芳香を伴って、語りかけてくる。その時を待てばいい。1年後には、1年寝かせた分の味わいがある。5年後には5年分の深みがある。でも今の味は、今しか楽しめない。だから今、買ってください。お願いします。

『ぼくを燃やす炎』
マイク・ライトウッド（著）
村岡直子（訳）
（サウザンブックス2,600円＋税）

『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』

text:生島 嗣｜特定非営利活動法人 ぷれいす東京

日本で初めてゲイであることをオープンにした上で神学生となり、キリスト教会から牧師として招かれた平良愛香さんの自伝。実は僕自身も同じく牧師の家に生まれたゲイ男性。この本に出てくるキリスト教系の座談会にも、匿名でご一緒していた。本書を読むと、近しく過ごしてきたと思っていたが、知らないことがたくさんあった。彼のいまの有り様に至るのには、それなりの歴史、必然があったのだと知った。

本書は愛香さんと彼の家族のファミリーヒストリーでもある。キリスト教の牧師であり、沖縄の基地問題の闘士でもあるお父さん。教育方針は「自分らしさを大切に」という前向きなお母さん。4人兄弟の3番目で、「愛香」というユニセックスな名前を付けられ、そんな家族の中で育った青年が、ゲイとして目覚め、恋愛を経験し、生き方を見つけていく。その半生に対し、本人や家族、周囲の人たちがどのように向き合ってきたのかが（一部赤裸々に）綴られている。

愛香さんの家族へのカミングアウトは、兄弟からスタートした。サポーティブに受け入れられたが、両親へのカミングアウトでは、とても慎重になっていたようだ。両親に、牧師になる決心、同性愛者であること、カミングアウトして牧師になろうと思っていることなどを一気に伝えたという。

お母さんの第一声は、「それは育て方に原因があるの？ 治らないの？」だったという。愛香さんからの説明のあと、「あなたがこれ以上苦しむのは見たくない。カミングアウトして牧師になるのであれば、私が死んでからにして」といったん口にしたお母さんは、しかし、すぐさまこう重ねた。「今のは撤回する。親としてはやっぱり愛香を応援していたいから、勉強させて」と。

お父さんからの反応はカミングアウトの翌日で、「愛香がすばらしい女性と出会えるように祈ろうと思う」だったという。しかし、時間の経過とともに、「同性愛者ということが、神が愛香に与えた十字架なんだな」と言ってくれたそうだ。

信仰からくる「揺れ」は、ご両親にもあっただろう。聖書のなかには、同性愛に対してネガティブな記述が複数箇所あり、普段から教会で朗読されているということもある。ましてや当時の国内の教会には、ゲイでキリスト者はいただろうが、それは見えない存在だった。初めてカミングアウトを受ける相手が息子や娘である場合、信仰との整合性と、親であることからくる子を思う愛情との間で、多くの親は板挟みになるはずだ。僕の家族もそうだった。

本書を読んでふと思い出したのが、『ピンクドット沖縄2016』の会場で見かけた、「わたしの自慢の息子はゲイです」と背中にプリントされたTシャツを着た、気品のあるご婦人の姿。彼女こそまさに、愛香さんのお母さんだったのだ。

20代の頃、僕はアメリカのウェストハリウッドやニューヨークの長老派のゲイの教会に行き、下手な英語で「信仰とゲイのセックスはどのように整理しているんですか？」と聞いてまわっていたことがある。あの頃、「本書があったなら」と思う。キリスト教と同性愛の間で悩む、次世代の当事者やその周囲の人たちへの貴重な道標に、本書はなるだろう。そして今では、ゲイだけでなく、レズビアン、トランスジェンダーと多様なセクシュアリティの聖職者が、この日本に存在している。

『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』
平良愛香（著）
（学研プラス1,300円＋税）